

平成30年度第1回都市科学部運営諮問会議議事録

日 時 平成30年7月10日(火) 15時00分～16時48分

場 所 事務局本部棟 第1会議室

出 席 佐土原 聡（主宰）、齊藤 麻人、中村 由行、加藤 尊正、蛭名 喜代作、
高尾 成弘、田村 隆弘、周佐 喜和（陪席）

議事に先立ち、佐土原学部長から挨拶があり、資料1にもとづき、学内委員および学外委員の紹介があった。

続いて、資料2にもとづき、平成29年度第2回都市科学部運営諮問会議議事録の確認があり、原案のとおり承認された。

議 題

1. 平成29年度に係る評価結果について

佐土原学部長から資料3にもとづき、平成29年度に係る評価結果について、報告があった。また、佐土原学部長より以下の補足説明があった。

【3】－1「教育課程に対応した設備・施設等が十分整備されているか」の問いに関連して、今夏に都市科学部講義棟を改修し、学生の居場所となるようなスペースを設ける予定であり、学生にとって良い環境になると考えている。昨年度末にはフューチャーセッションスペースの設備を整え、今年度から授業が開始される。

【3】－2「財務基盤が適切か」の問いに関連して、特に部局長戦略経費が不十分であるという意見があったことを執行部にも伝え、課題として認識しているが、今年度も十分な予算状況とはいえない。

2. 平成29年度都市科学部運営諮問会議における指摘事項および課題について

佐土原学部長から、資料4から資料10にもとづき、平成29年度都市科学部運営諮問会議における指摘事項および課題について説明があった。これに関連して、委員より以下の意見が寄せられた。

○都市科学部における学生の受入れ（入試・広報）

建築学科において入学辞退者が相次ぎ定員がマイナスとなったことについて、

- ・新しい都市科学部、建築学科を中心に、もっとストレートに魅力を伝える努力を。
- ・ホームページの冒頭に分かりやすい動画を入れて、OBで有名な方に語り掛けてもらうなど、中身を読んでもらう工夫が必要。
- ・新学部ということだけでなく、今までの実績をきちんと引き継いでいる部分も強調すると良いのではないか。
- ・高校生とか高専生の方から見たときに、果たしてここで何が学べるのか、また、出口のイメージが持てるように分かりやすい情報提供を。

評価となる指標について、

- ・アドミッションポリシーとアンケート項目を一致させ、5段階で選択してもらうことで、入学者が確かにアドミッションポリシーに沿ったモチベーションで入ってきているということが確認できるので良い。
- ・学年進行に合わせて、あるいは卒業時に同じようなアンケートを用意して、学生たちが都市科学部で学んで目標を満たすことができたというようなことが統計的に出てくると良い。学生の満足度というのは一つ大事な指標である。

○文理融合の推進

- ・基幹知科目について、学科としては確かに基盤となる科目だと思えるけれども、学部としてはそのように感じられない。
- ・基幹知科目の授業科目名やシラバスの内容を、担当教員の協力を得て、文系学生も履修しやすいように工夫すると良いのでは。

○財政基盤および施設整備

- ・国立大学全体の運営費交付金が少しずつ減るという状況のなかで、どこかから資金を調達しなければならない。そういったことが学部レベルでもできるのか、やるとしたらどのようなことが考えられるのか、アイデアを出していかなければならない。
- ・面白い授業を実施したり、イベントを開催したり、あるいは出版物を作るなど、学生のために何か面白いことをするための経費が確保されていないのではないか。外部資金の獲得など、いろいろな工夫をせざるを得ないのでは。

3. 平成30年度に係る評価について

佐土原学部長から、資料11にもとづき、平成30年度に係る評価について説明および依頼があった。

4. 都市科学部への期待・提言

全体をとおして都市科学部への期待・提言として、委員から以下のコメントがあった。

- ・例えばシンポジウムの協賛金を集める、授業を大学のなかだけで組み立てるのではなく地域や企業とタイアップして一緒に授業をつくっていく、出版物にかかる費用を大学の予算だけでなく広く資金を集めるなど、さまざまなアイデアが必要ではないか。
- ・地域の発展に大学だけが頑張るのではなく、企業や自治体と一緒に頑張りましょうということで応援していただくということは十分に考えられる。都市科学部は地域に根差した学部なので、そのあたりを積極的に活用してはどうか。
- ・昨今の自然災害をみても、本当に都市科学が何とかしなければならない部分が多くあると感じた。都市科学部がやらなければならないことはたくさんあるのではないかと、大いに期待したい。
- ・最近の高校生は地方国立大学へあまり行きたがらず、東京の大学を志望する。下宿するのなら東京の私立大学で良いという傾向がある。そのあたりを広報戦略で意識する必要がある。
- ・愛校心が強いOBの力を借りてはどうか。

- ・学生がおとなしいという話があったが、実は大学もおとなしいのではないか。もっとももっといい大学、いい学部なのだということをアピールして、自然とさらに優秀な学生が集まるような、そういう取り組みを2年目、3年目と続けてほしい。
- ・学生アンケートによって学生の思いや考えについては評価するうえでの参考となったが、学部担当教員の1、2年経ってみてどうかという自己評価や意見についてアンケートができると、さらに参考になると思う。
- ・可能であれば、ゼミの見学や学生と直接話ができるような機会を設けてほしい。
- ・学生は教員が思っている以上に情報収集能力やプレゼン能力、デザイン能力が高い。案ずるより産むがやすしというところがあるので、学生が活躍できるようチャレンジしてほしい。